

一昨日（28日）、襟裳岬と静内20間道路の桜見物に出かけた。広尾町から襟裳町庶野までの国道33キロは、切り立った断崖の絶壁であり、覆道が数知れず、海が時化たときには通行もさぞや困難であろう。この道路は通称“黄金道路”と呼ばれる。近藤重蔵らが完成10年に産炉を切り開いたことに始まり、その後、昭和2年から9年にかけて、本格的な工事が始まったが、想像を絶する絶壁と岩礁のために、多大の費用を費やしたことから、このように呼ばれる。

襟裳岬は、思いの外観光客が多かった。ゼニガタアザラシは繁殖の時とかで、多数が群れ成していた。襟裳は日本最大の繁殖地だそうだ。流石に、歌にあるが如く風が強く、一時期は襟裳周辺の山は見事な禿山になったそうだが、地道な努力により、緑が回復し、漁業も従前に戻ったと言う。自然の輪廻を知り、失われた自然を回復することの至難さを思う。

静内に向かう徒次、馬をモチーフにした街路灯が浦河、三石、静内の3町に亘って設置されていた。流石に日高は、馬の産地だ。静内20間道路の桜並木は丁度見ごろであった。幅二十間、延長8キロの並木は、新冠御料牧場を視察する皇族方の行啓道路として造成された。桜の植樹は、大正5年からで、近隣の山々から移植された蝦夷山桜等は今では、3,000本に上る。帰りは、天馬街道だ。日高支庁内を運転しているときに、面白いことに気づいた。「馬横断注意」の看板があちこちに出ているのだ。矢白別演習場周辺では確か、[牛横断注意]だった筈だ。十勝では両方とも余り見かけないが・・・。地域の特性を如実に現した看板だ。

忠類村の晩成でナウマン象が発見されたのは、1969年であるが、この象は約12年前に生息していたという。太古のロマンに浸ってみてはどうだろうか。

日高から十勝に入ると、そここそ北海道という雄大な大平原が広がっている。残念ながら、防風林のため、車窓からその雄大さを一望できないが・・・。また、畑地の多さにも驚かされる。冬を越したのであろうか、小麦が一面青々としているかと思えば、植え付けたばかりかまたはその真っ最中の甜菜が緑の列を為しているのも十勝を代表する陽春の風景である。これらの風景を眺めると十勝が日本の食料基地とか、農業王国と言われるのも頷ける。

十勝の農業王（立）国振りを耕地面積比率や農作物収穫量で調査して貰った。耕地面積は、対全道比22%、対全国比5%である。小麦は全国の35%、馬鈴薯は31%、小豆43%、甜菜45%、スイートコーン47%を占めている。勿論、酪農王国でもある。乳用牛頭数は全国の12%、肉用牛頭数は、全国比6%（全道比39%）である。

屋台と言うと、縁日のときにホットドッグや綿飴等を売っている屋台店や終戦直後の焼け跡に雨後の筍の如くに姿を現した露天商を思い出す人も多かろう。酔って街中を徘徊した折に屋台のラーメンが美味しかったのを思い出す者もいよう。一般的に言えば、屋台と言えば余り良いイメージはない。非衛生的だとか、料金がどうも不明朗だとか、暗くて何となく怖いとかと言うイメージも付きまとう。

そのようなイメージを完全に払拭し、今や帯広の新名所となり、連日大勢のお客で賑わっているのが、帯広駅北側に2001年7月29日オープンした『北の屋台』である。北の屋台には、バラエティ豊かな屋台が、今私の手元にあるパンフレットによれば、18軒（屋台であれば、“台”というべきか）、西1条南10丁目7番地の約50mの小道に軒を連ねている。この小道は、人生を“生き抜く”力強さと“息抜き”をするやすらぎの二つの側面を持たせて“いきぬき通り”と称し、

大理石のシンボル像は、[ikinukin]であり、通りの中央付近でお客を招き猫よろしく迎えてくれる。

さて、屋台と言う概念から、北の屋台は大分かけ離れている。先ず第一に綺麗で衛生的である、移動はしない、色々な料理が出される。寒さよけもバッチリだ。個々の店が独立していながら、全体として集合している。道路法、道路交通法、食品衛生法、消防法、建築基準法、風俗営業法等の諸々の法的規制を見事にクリアしての開店である。民有地を活用し、屋台を集合化し、一部固定式店舗を考案する等により、クリア出来たのである。帯広の中心街の活性化を願う人々の熱意がこうして実を結び、全く新しい十勝型の屋台が出現したのである。勿論、帯広商工会議所の絶大なバックアップがあったことは言うまでもなかろう。会頭から、是非寄ってくれと言われており、近々にはと思っている。

尚、写真は、タイトルに相応しいものをと考えているが、アイデアなし。何れ披露したい。

(参考：説明看板、各パンフ、HP、師団司令部2部地誌班資料等)